

森下仁丹のサステナビリティ

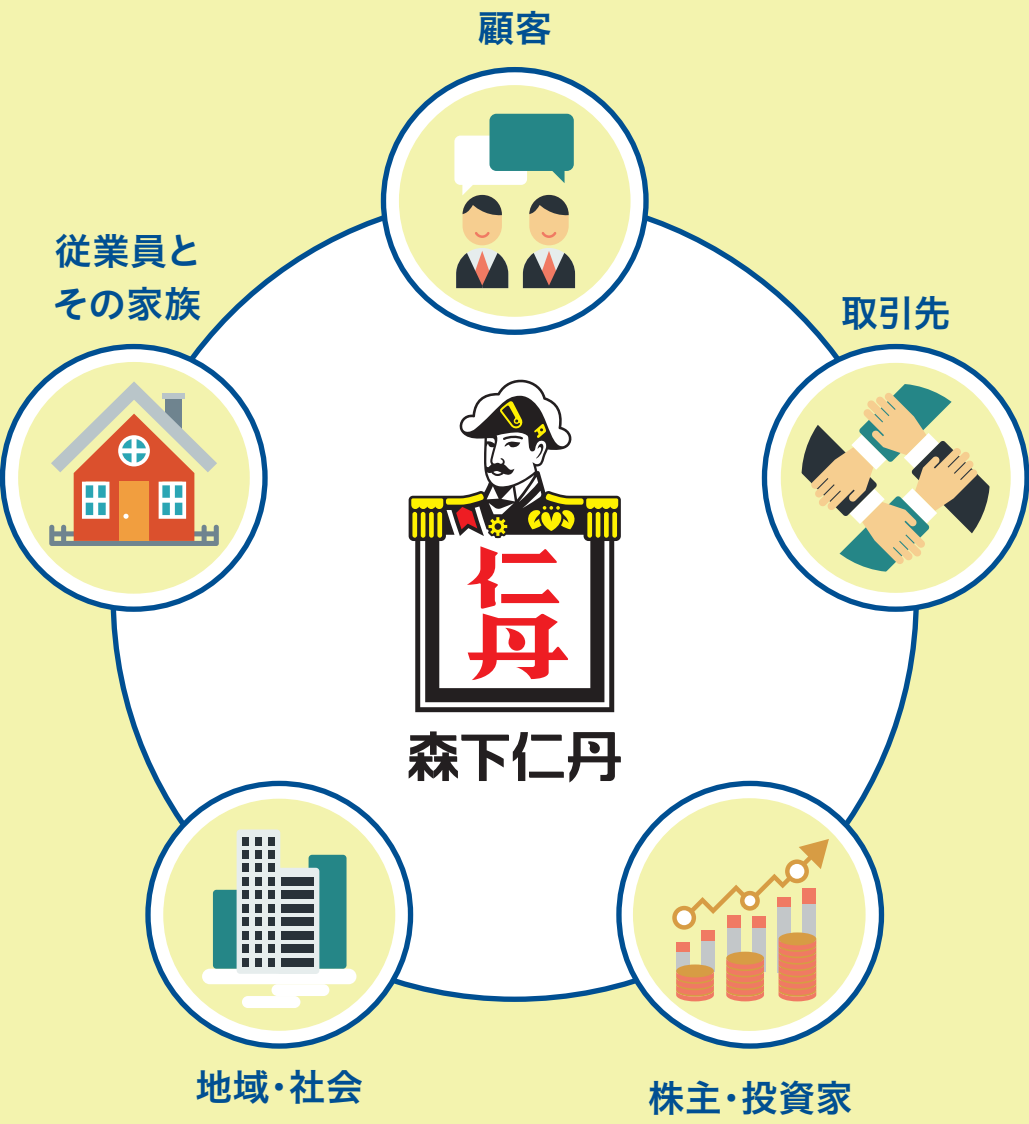
SUSTAINA SECTION

BILITY



ステークホルダーとのつながり

対話を重ね、ともに未来を育む



森下仁丹の事業活動は、お客さまをはじめとして、従業員とその家族、またお取引先さま、地域社会の皆さまや株主・投資家といった、さまざまなステークホルダーに支えられています。ステークホルダーとのコミュニケーションを通じて社会課題を認識し、解決に取り組むことで、企業としての責任を果たすとともに、皆さまの期待と信頼にお応えします。



製品やサービス、コミュニケーションを通して、お客さまの今と未来の課題解決に貢献します。

お客さまからの信頼がなければ、事業活動は成り立ちません。森下仁丹ヘルスコミュニケーションズでは、薬剤師や管理栄養士などの有資格者を配置し、お客さまからのご質問やご相談に万全の体制でお応えしています。また、すべての生産拠点でGMP（適正製造規範）をクリアするなど、高い水準での製品づくりに努めています。



公正で活気に満ちた職場、従業員やその家族の心身の健康づくりも支援します。

従業員とその家族が健康で生き生きとした生活を送ることが、企業の成長につながると考えています。日本に健康保険制度ができてまもなく健康保険組合を設立するなど、これまでも従業員とその家族の健康を大切に守り続けてきました。さらに、安全で快適な職場づくりや、多様な人財が活躍できる環境整備にも取り組んでいます。



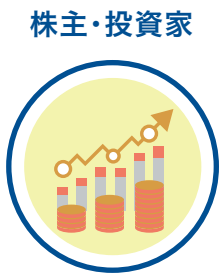
ともに価値を生み出すパートナーとして、事業活動を通じ信頼関係を構築していきます。

お取引先さまは、新しい技術や製品の価値をともに高めていく大切なパートナーです。信頼関係を築くために、品質や製造管理体制の監査対応はもちろん、各法令を遵守した取り組みを徹底します。また、私たちの製品を販売して下さるお取引先さまについては、製品説明会や、関連する健康情報の提供など幅広くサポートを心がけています。



事業を通じて、企業としての社会的責任を果たし、地域に暮らす人々と豊かな社会の実現を目指します。

ほうほんはんし
「報本反始（謙虚な心を忘れず、自分自身が存在するに至った根源のすべてに報いる）」の精神のもと、以前より創業者森下博の地元・鞆の浦（広島）への寄贈や寄付を行うだけでなく、国内外のさまざまな地域で、健康への啓発イベントやスポーツ支援を通して地域社会の皆さまへ貢献しています。



永きにわたって信頼していただけるよう、適切なコミュニケーションの場を設けています。

株主・投資家の皆さまとのコミュニケーションは、本決算・第2四半期決算時の説明会に加え、必要に応じて個別対話のご要望にもお応えしています。また、IR活動で寄せられたご意見は、担当役員から経営幹部、関連事業部門へと共有するほか、未公表の情報については、特定の投資家のみに伝わることをしないよう、社内規定に従った情報管理を徹底しています。

5つのマテリアリティ

リスクと機会を正確に捉え、 企業経営を強力に推進

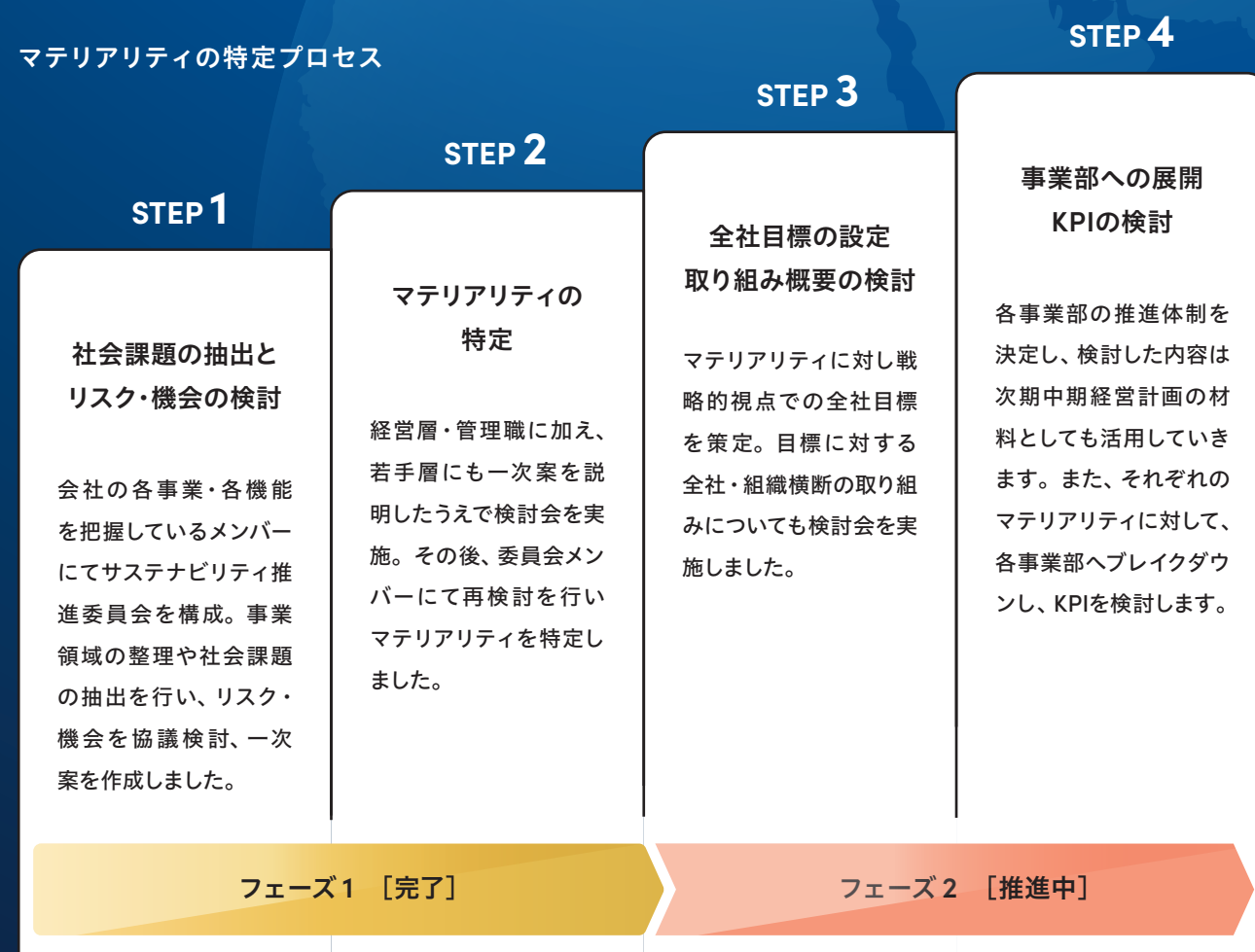
企業としての社会的責任を果たしながら、持続可能な社会と企業活動を両立させるため。

創業130周年を契機として、2023年2月に策定したパーパスを基点に、

中長期視点で取り組むべき重要課題(マテリアリティ)を特定しました。

森下仁丹は、社会の課題解決を目指し、事業を通じて貢献していきます。

マテリアリティの特定プロセス



健やかさ、豊かさへの貢献

森下仁丹が持つ“包む技術”と“素材技術”をさらに強化し、国内だけでなく海外市場のニーズの変化にも柔軟に対応していきます。また、セミナーや研究発表などの開催を通じ、予防とセルフ・メディケーションの支援・浸透にも貢献します。



森下「仁財」の活躍推進

次世代リーダーの育成を目的とした「仁丹大学」の開校や360度評価、管理職研修など、リーダーシップ開発に力を入れています。また、業務上必要なスキルトレーニングに加え、入社間もない時期からCSR活動に取り組むことで、企業の社会的責任について理解を深める機会を提供しています。



安心・安全な製品の供給

お客さまの健康被害や製品回収などにつながる不良品の発生を防ぐため、品質保証体制の維持管理やBCP推進、外部認証の取得を推進。同時に、気候変動や自然資本の減少に対応できるよう、調達先と継続的なコミュニケーションを行い、安定した原材料調達ルートを確認します。



地域環境への配慮

気候変動対策の取り組みとして、CO₂排出量の削減を目的に、省エネ機器の導入や製造工程の開発、エネルギー調達ルートの見直しを実施します。あわせて、環境負荷を低減するため、水使用量の削減や製品の賞味期限延長、資材ロスの低減といった活動を推進していきます。



経営基盤の強化

コンプライアンスやリスクマネジメントに関する方針・施策を協議する場として、各委員会を設置。社外取締役を置くことで、経営の透明性向上と、公正かつ迅速な意思決定を伴うシステムの維持、および監視機能の強化を目指します。また、国際規範を遵守し、人権を尊重した事業活動を行います。





5つの マテリアリティに 込めた想い



マテリアリティ策定メンバー（写真左から）

※所属部署・肩書は座談会当時のものです。

製造

与太夫 健一

生産本部 滋賀工場
生産企画グループ グループリーダー

営業

中野 雅士

サステナビリティ推進委員長
コンシューマー事業部
リテール事業グループ グループリーダー

研究
開発

河野 麻実子

研究開発部 副部長

資材
調達

塩澤 寿

資材購買部 部長

★「らしさ」にこだわったマテリアリティ ★

中野 森下仁丹の事業活動と社会課題を結びつけ、注力して取り組むべき課題を明らかにする。長期的な企業価値を維持するため、会社が進むべき方向を明文化する必要がありました。

河野 130周年を迎えるタイミングで、社内にていくつかのプロジェクトが立ち上がりました。サステナビリティ課題の検討とマテリアリティの策定を行う際にも、各プロジェクトとの連動や相乗的な関係性を強く意識していました。そのプロセスでパーパスは、私たちの議論の重要な軸になっていたと感じます。

与太夫 サステナビリティ推進委員会のメンバーは、所属している部署も、担当している業務も異なるので、たとえば「技術」という言葉一つとっても捉え方が全然ちがっているんですよ。

塩澤 そうなんです。だからこそ言葉の定義付け、そして概念の解釈を揃えるのにパーパスが役立ちました。営業や購買、開発生産などの立場を超え、皆が理解し、納得できる指針ができたことで、社内のさまざまなスケールでの議論がスムーズになったと思います。

河野 フェーズ1において、まずは私たちがサステナビリティやマテリアリティの知識を深めつつ話し合いを行

いました。外部のコンサルタントにも入ってもらい、近い企業の内容も参考にしながら、森下仁丹ならではのマテリアリティの特定を進めました。

与太夫 数ある社会課題が、事業の発展を阻害するリスクとなるのか、それともビジネスを拡大する機会となるのか。その判断は各部署によって異なることもあり、意見の「発散」よりも「集約」の方に時間がかかった印象があります。

中野 私たちらしいマテリアリティをつくるため、言葉選びにも時間をかけましたよね。たとえば「森下“仁財”の活躍推進」。森下仁丹は創業より「家族主義」を掲げており、従業員は家族と同様であるという考え方がカルチャーとして浸透しています。これからも従業員を大切に守り、育んでいきたいという想いを、思いやりの気持ちを示す仁と財産の財を組み合わせた、「仁財」という言葉で表現しました。

与太夫 一般的な「人的資本」という言葉を使ってもいいけれど、ちょっと無機質に聞こえるかもしれない。メンバーそれぞれの「らしさ」や「感性」を擦りあわせ、長く愛される、ずっと腹落ちする言葉遣いを意識して文章を組み立てています。

★まずはサステナビリティを身近に感じてもらう ★

中野 現在は、各事業への落とし込みはもちろん、マテリアリティをステークホルダーとの対話ツールとして活用することも意識しています。先立って社内では、サステナビリティに対する意識向上やマテリアリティの浸透を目的とした勉強会を始動させました。

与太夫 滋賀工場ではISO14001をテーマに話を進めました。普段当たり前のように行っている業務の積み重ねが、サステナブルな社会の実現につながる行動であると説明し、当事者意識を持ってもらう。全員に理解してもらえるよう、伝え方は特に工夫しました。

塩澤 従業員に浸透させるには、日々の業務と地続きの場所にあると実感してもらうことが重要で、単に勉強した言葉を並べるだけでは心に響かないと思うんですよ。資材購買部門であれば、質の高い生薬原料の確保は最大のミッションであり、製造プロセスを回すための絶対条件です。しかし生薬農家をはじめとするサプライチェーンにも、輸出入の規制や環境問題、労働力確保といったバックグラウンドがあり、質の高い素材を安く買い付けて終わりというわけにはいきません。実務を通し、問題の根本がサステナビリティに通じていることを伝えるようにしています。

中野 私は営業という職種柄、これまでは製造時の環境への配慮やサプライヤーとの関係性維持などを直接的には意識してきませんでした。本プロジェクトへの参加をきっかけに、新しい観点を知り、物事を広く捉えられるようになったと感じています。

河野 策定したマテリアリティは、異なる業務すべてに通じる「森下仁丹らしい」内容だと自負しています。マテリアリティは策定して終わりではなく、そこがスタートラインです。全社の推進力を上げるため、まずは各部門やグループに対する説明の機会を増やしていけたらと思います。

与太夫 従業員一人ひとりの意識を変えていくことはもちろん、取り組みの進捗を定量的に評価するために、KPIやアウトカムを設定しなくてはなりません。この点について現在、急ピッチで議論を進めています。

塩澤 各部の業務とマテリアリティをつなげていくことで、自然と価値創造プロセスの全体像も見えてくるはず。会社の向かうべき方向を明確にし、皆で社会課題を解決するとともに、しっかりと実務や業績にも反映できるよう活動を続けていきます。

ロレアル×森下仁丹 カプセル開発座談会

パートナーとの価値共創で、豊かさを世界へ

森下仁丹の技術で社会課題を解決し、さらに広い領域で「健康と豊かさ」を実現するために。

私たちはさまざまな企業と手を取り合い、技術を進化させて、お客さまのもとへお届けしてきました。

今回は、ロレアルと共同で開発した「アクティブデリバリーカプセル」をご紹介します。

L'ORÉAL
RESEARCH
& INNOVATION
JAPAN

世界150カ国で事業を展開するフランスの化粧品会社。日本ロレアルは、日本法人として国内で18のブランドを展開しています。



森下仁丹

喜田 裕介

研究開発部 製剤開発グループ
カプセル製剤技術の応用・開発を行う。
本案件では製品化をメインに担当。

日本ロレアル株式会社

斉藤 誠

リサーチ&イノベーションセンター
スキンケア応用領域研究 プロジェクトリーダー
加齢や紫外線などによる肌の悩み全般を
解決する製品の開発を担当。

カプセルで創出する新しい価値

喜田 本プロジェクトの走り出しは、ロレアルさまからのお声がけだったと記憶しています。数ある企業のなかから、パートナーとして森下仁丹を選んでいただいた理由をお聞かせください。

斉藤 一番は森下仁丹さまが強みとする優れたカプセル製剤技術を、私たちが扱う製品に取り入れることで、新しい価値を創出できると感じたからです。今回開発したカプセル配合の美容液「クレマ ネラ RV コンセントレート」は、ロレアルのなかでも最高峰のラグジュアリーブランド「アルマーニ ビューティ」の製品。単に「機能性」が高いだけでは、顧客が求める付加価値には届きません。特に化粧品というものは、手に取り眺めているだけでも期待や満足感を覚えるような、「見た目」にも優れた製品をつくる必要があります。この「機能性」と「見た目」をどのように両立させるべきかと考えたときに、貴社のカプセル製剤技術が目にとまり、お声がけさせていただきました。



喜田 ありがとうございます。

今回、皮膚に植物由来の化粧品有用成分を入れるだけでなく、カプセル自体の見た目や崩壊性などのご要望にも応えるべくさまざま試行錯誤をしたことは、私たちにとっても大変勉強になりました。販売まで無事に行うことができ、ホッとしています。

斉藤 貴社の、顧客の要望にあわせ柔軟にカプセルをカスタマイズできる点もロレアルとの親和性が高いと感じ、お声がけしました。開発にあたり、機能性と見た目以外にも多くの要望をお伝えしたのですが、高い技術で応えてくださり、とても心強かったです。

喜田 私たちは、可食分野のカプセル製造においては自社の強みを発揮できており、市場でのプレゼンスを得ていると自負しています。しかし、今回のような非可食分野においては経験が少なかったこともあり、当社のカプセル製造技術が化粧品の観点だとどのような点が魅力に映るのか、その優位性を把握しきれていたとは言えません。ロレアルさまの化粧品がもつ特性やイメージ、オリジナル性にあわせてカプセルをつくり上げていく過程

で、これまではあまり意識していなかった自社のカプセルの可能性に気づき、視野を格段に広げることができました。

斉藤 互いに実りがあるプロジェクトになりましたね。

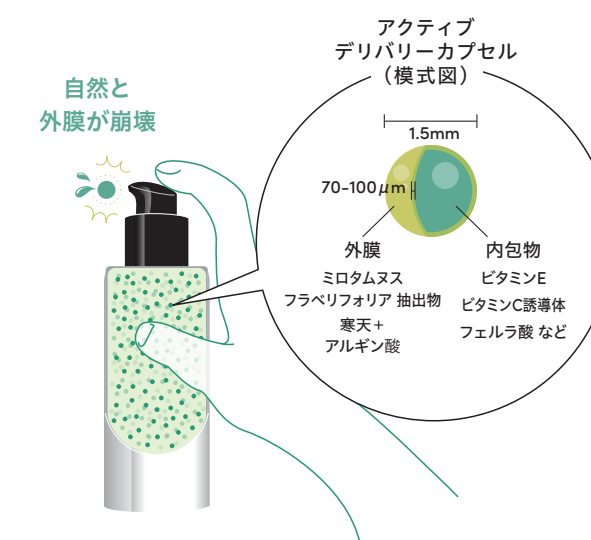
「機能性」と「見た目」の両立

喜田 実際にプロジェクトが始まってからは、とにかくトライ&エラーのくり返しで、製品の美しい見た目からは想像がつかないほど泥臭く取り組んできました。

斉藤 「機能性」を訴求するうえでの大前提として、カプセルの皮膜や中に含まれる美容成分は品質を長期間維持する必要があります。一方で使用シーンを考えたときに、カプセルの皮膜が残ってしまうと肌に違和感を感じさせてしまいます。肌につけたときは自然に馴染むけれど、決して容器の中でカプセルが割れることなく、美容成分をしっかり守り続ける強度を実現したい。森下仁丹さまにはかなりハードルの高い要求をしてしまいました。

喜田 いえいえ、カプセルの崩壊性と安定性については私たちが長年強みとしてきた技術です。信頼し、らせていただけて光栄です。

斉藤 完成品は、皮膜を極限まで薄くすることで、ポンプの吐出圧力により自然と膜が壊れる状態で仕上げていただいて、私たちとしても納得できる製品になりました。カプセルの皮膜が薄いからこそ、つけ心地も自然なうえ、化粧品が重視する「見た目」という点でも完成度が高いものに仕上がりました。カプセルの透明感が美しく、気分も高揚します。



喜田 カプセルとしてのビジュアルを高めるためには、内包物の成分にも注意を払う必要があります。ロレアルさまと何度も調整を重ね、理想のかたちに仕上げることができました。細部に至るまで、すべて二人三脚で進めてきたプロジェクトだと感じています。

斉藤 当社としてのこだわり、想いにも森下仁丹さまは真摯に向き合ってください、両社の足並みがずれることはなかったですね。ロレアルは2030年に向けて「ロレアル・フォー・ザ・フューチャー」という環境や社会に対するサステナビリティ活動を行っているほか、石油由来成分よりも効果的な自然由来成分を見つけ、活用する「グリーンサイエンス」にも注力しています。「アクティブデリバリーカプセル」も自然由来の原料にこだわり、「ミロタムヌス フラベリフォリア」という再生力の高い植物から抽出した化粧品有用成分など自然由来成分のみを使用し開発を進めてもらいました。

喜田 自然由来かつ、化粧品の有用成分を含んだ「アクティブデリバリーカプセル」の製造は、森下仁丹としても初の試みです。カプセル強度の安定性のコントロールも考慮して、私たちからも原料の提案をさせていただきました。

斉藤 美容液やカプセル、内包物のそれぞれで生産体制が異なるため、量産は通常と比べ困難だったと思います。原料の選定はもちろん、製造・物流の整備に関しても工場間できめ細かくやり取りし、無事に量産化にこぎつけました。

喜田 肌に直接つけていただく製品のため安全基準が厳しく、品質の確保にも苦心しました。今後も高品質のカプセルを安定して供給するため、「ワンランク上」の体制を敷き、生産に臨みます。



知見と技術の交換で新しい領域へ

斉藤 本製品は2021年に中国で先行販売をされ、当初の想定を上回る反応をいただきました。そして現在、「アルマーニ ビューティ」を代表する製品のひとつとして成長しています。今回、カプセルの皮膜にも化粧品有用成分を付与しましたが、その技術を活かして、さらなる付加価値を提供できるのではないのでしょうか。森下仁丹さまからも、カプセルの活用法についてご意見をいただければ幸いです。

喜田 受託事業ということで、基本的にこれまで、あらかじめ設定された課題に対しカプセル製剤技術を使って解決するという手法を取っていました。一方でこれからは、私たちからも積極的に企画を提案する必要があると感じています。そのために、異業界や異分野に対するナレッジを蓄え、知見をより深めていきたいと思います。

斉藤 化粧品業界において、製品の「魅力」を決める指標はさまざまあります。見た目はもちろん、使用感や香りなど付加価値となりうる要素がソフト面にも多く存在しているからこそ、森下仁丹さまのカプセルに担っていた役割は非常に大きいと感じています。

喜田 私たちのカプセルは今まで、安定性や硬さに強みをもっていました。それが今回の共同研究を通して、薄くて壊れやすいカプセルという新領域に挑戦し、新しい価値を生み出すことができました。自社内の研究や開発のみだと、どうしても視野が狭くなります。これからロレアルさまをはじめとしたさまざまな企業と連携し、私たちが持つ既存の技術を発展させ、社会課題の解決や豊かな生活の実現に貢献していければと思います。今後とも、よろしくお願いいたします。



異業種や大学と技術や知恵を交わし 社会課題を解決する製品を生み出す

森下仁丹は「世の中の困りごとを解決し、人々の健康や豊かさに貢献したい」という想いのもと、外部と積極的に技術や知識を交わし、新しい価値を生み出す「オープンイノベーション」を永きにわたり推進してきました。自社がもつシームレスカプセル製造技術と、異業種や大学がもつ技術や知恵を組み合わせ、はじめて生み出せるアイデアや製品があります。今後もさまざまな分野のパートナーとともにトライ&エラーを繰り返し、強みをさらに強化していくことで、新たな価値を生み出していきます。



可食分野

カプセル製剤技術領域 オープンイノベーションの変遷

非可食分野

2013年
簡便に感染症を防ぐ
「経口ワクチン」に関する特許取得
[神戸大学]
抗原を腸溶性カプセルで包み、腸まで届ける経口ワクチンを共同開発。注射よりも容易で安価に投与できる飲むタイプのワクチンを目指し、現在もさまざまな感染症や疾病のワクチン実用化に向けて開発を進めています。

2016年
「ビフィズス菌SP株」が
生きて腸まで届くヨーグルト
[雪印メグミルク㈱]
「ビフィズス菌SP株」を腸溶性カプセルに入れて、生きたまま腸まで届けるドリンクタイプのヨーグルトです。腸溶性カプセルは特殊技術による3層構造で、胃酸では溶けずに腸で崩壊する性質があります。



2022年
フレーバークапセルで風味が変化
KAORUヨーグルト
[雪印メグミルク㈱]
噛むとプチッと弾ける食感のカプセルに、レモンとミントのフレーバーを閉じ込めました。森下仁丹のカプセル製造技術を活用した、リフレッシュと風味の変化を楽しめる新感覚のヨーグルトです。



※2023年4月販売終了

2015年
希少な非鉄金属を取り込む
レアメタル回収バイオカプセルに
関する特許取得

[大阪公立大学(旧大阪府立大学)]
世界的に安定確保が課題のレアメタルを効率的に回収できるバイオカプセルを開発。カプセル内部に吸着剤や微生物を高濃度で保持させ、非鉄金属イオンを取り込むことで濃縮回収の可能性を見出しました。

2016年
擬似卵型駆除剤の実用化開発
シロアリ駆除カプセルに関する特許取得
[京都大学大学院]
シロアリによる木造家屋の被害は深刻ですが、薬剤を使うと環境への影響や健康被害が懸念されます。そこで、シロアリの習性に着目し、駆除剤入りの擬似卵を用いた駆除方法の可能性を見出しました。

2022年
「アクティブデリバリーカプセル」を開発
クレマ ネラ RV コンセントレート
[日本ロレアル]
植物由来の化粧品有用成分を皮膜に用いたシームレスカプセルを共同開発。ビタミンEやビタミンC誘導体などを配合した液体の内包物を、酸化や変質から長期にわたり守ります。

